

フィリピン理数科パッケージ協力  
RSTC 配属隊員巡回指導調査報告書

JICA LIBRARY



1189828 [5]

平成 8 年 5 月

国際協力事業団  
青年海外協力隊事務局

青派一
JR
96-02



## 序 文

平成6年（1994年）3月24日から5年間の協力期間で、フィリピン共和国に対する理数科教育パッケージ協力が開始されました。本協力は、チーフアドバイザーを中心として国際協力事業団のさまざまな援助形態が連携してフィリピン共和国の初等、中等教育における理数科教育の質を向上させることを目的としています。

この協力において、派遣事業部では、チーフアドバイザーの派遣を担当し、プロジェクト方式技術協力部門では、中央政府の行政レベルでの理数科教育教員指導者の養成及び教材の開発を、無償資金協力部門では地方の理数科教育センターの建設（予定）及び実験器材の供与（予定）を、研修事業部ではカウンターパート等の本国及び第二国研修を、そして青年海外協力隊では地方レベルでの理科教師に対する実験を中心とした理科教育法の指導をそれぞれ担当します。

協力隊はフィリピン国内の3つの地域（第5・第7・第11地域）にある地方理科教育センター（Regional Science Training Center=RSTC）に理科全教科（物理／化学／生物／地学）の隊員を1人ずつ派遣（一部については今後派遣予定）して、地方レベルでの理数科教師育成の目的のもと地方校の巡回指導などを中心として活動しています。

本調査団においては、協力開始から約1年半が経過したことを踏まえて、隊員活動の現状と問題点の把握、また今後の活動の指針形成を主目的とする調査を行いました。本報告書のなかで、それらについて分析・検討し、その内容が今後派遣される隊員及び関係者等のプロジェクトへの理解を進める上で役立つことを希望いたします。

終わりに、本調査団にご協力とご支援をいただいた関係各位に対し、心より感謝の意を表します。

平成8年5月

国際協力事業団  
青年海外協力隊事務局  
事務局長 高橋 昭



1189828 [5]

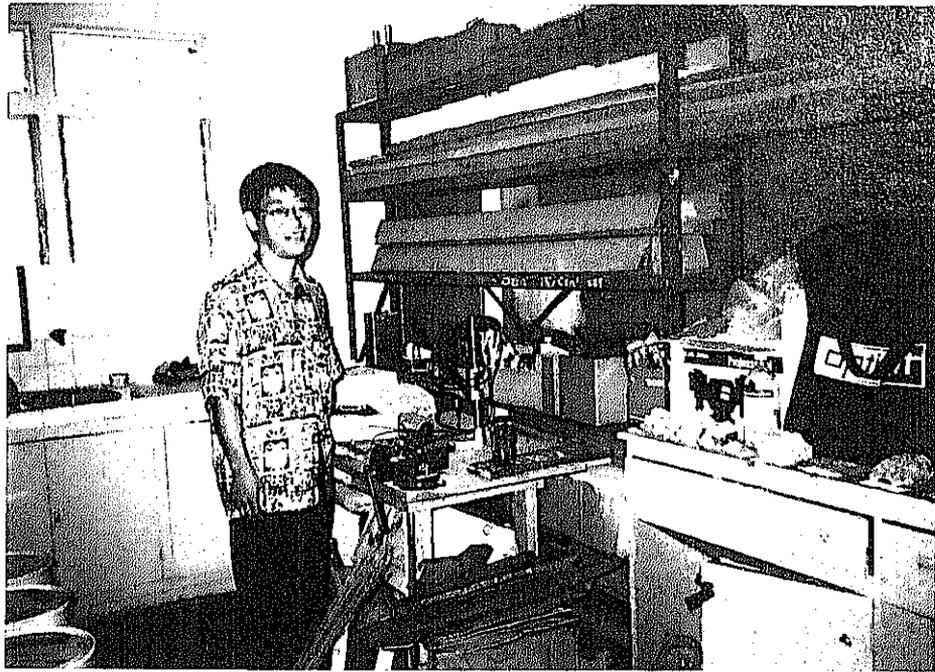


ビコールRSTC配属隊員(左端-藤田隊員, 左から4人目-福田隊員, 右端-山田隊員) RSTC所長(右から3人目), 及びカウンターパート



ビコールRSTC事務室





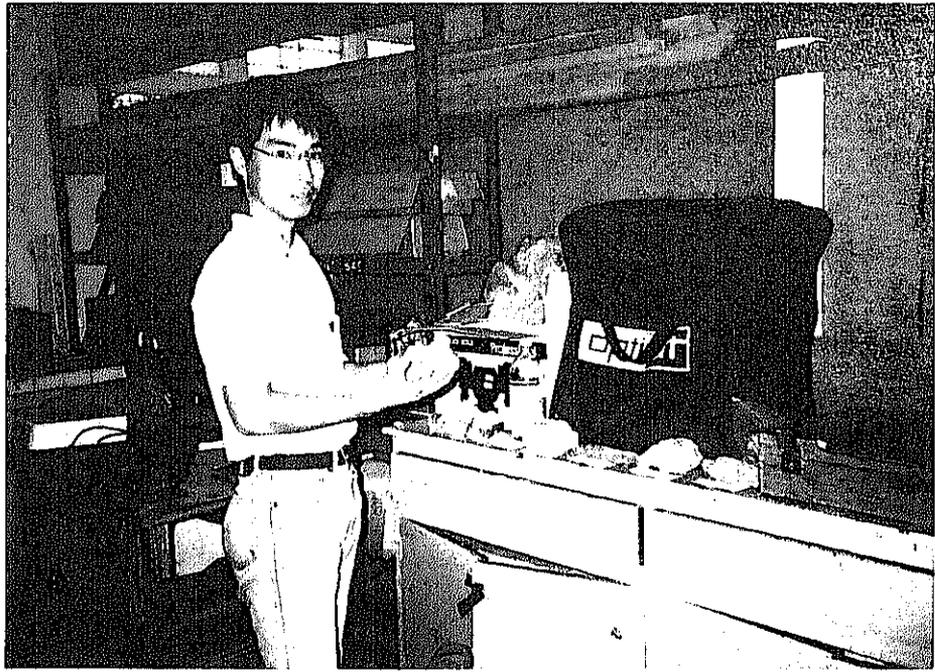
ビコールRSTC 工作コーナー（山田隊員）



化学コーナー

（缶内には使えそうな容器類／福田隊員）



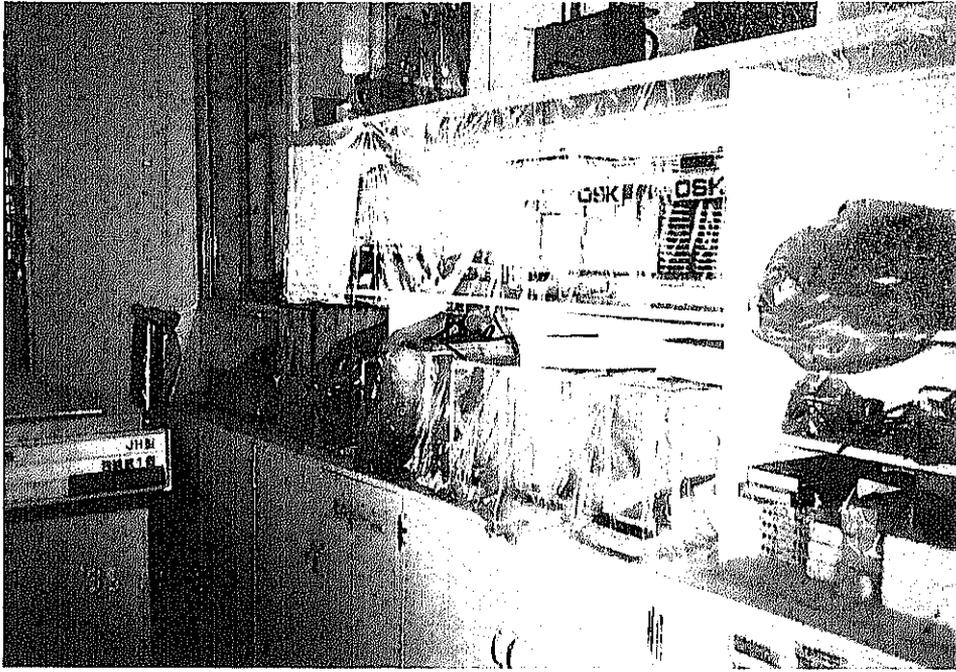


採取した化石（ビコールRSTC 地学担当 藤田隊員）



ビコールRSTC教室（実験室に隣接している）





JICA無償資金協力及び世銀などから供与された器材  
(ビコール大学RSTC)



同上，当初は棚もなく教室中に積み重ねられていたが，  
現在ではきれいに整理されている。





RSTC所長および、カウンターパート達との話合い  
(台風による停電のため外で行う)

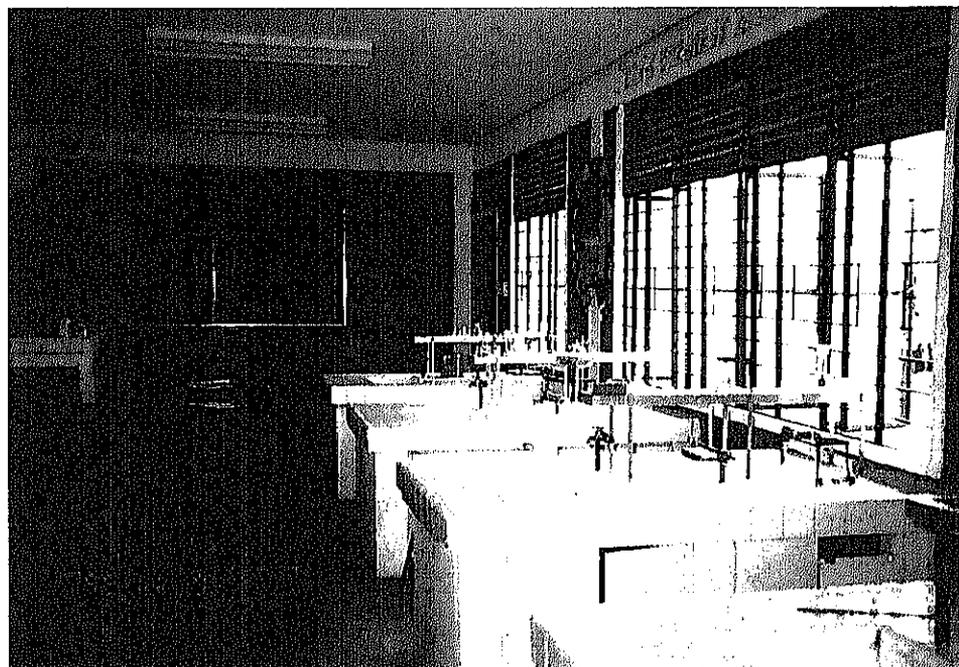


福田隊員にわる植物園内の池。台風の影響にあう





Region 5でのSMEEDPの地方研修が開催される予定の  
タバコ国立学校にある理科実験室  
(世銀のローンで供与されたもの)



上記建物内部





ウエストビサヤRSTC配属隊員（左から3人目－原隊員，4人目－三宅隊員）  
スタッフ（右から4人及び，左から2人目），学長（右から5人目）  
大野技術顧問（左端），及び山本派遣第1課職員（右から5人目）

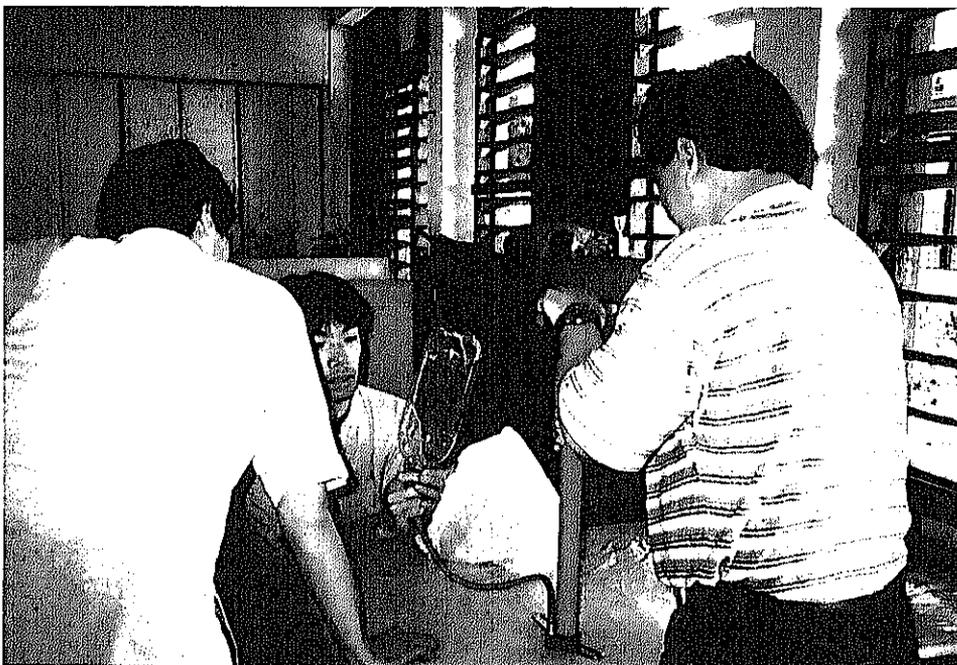


ウエストビサヤRSTCの準備室が入る予定の建築中校舎





ウエストビサヤRSTCスタッフとの打ち合わせ



ウエストビサヤRSTC  
原隊員（物理担当）の簡易な材料を使った模擬実験



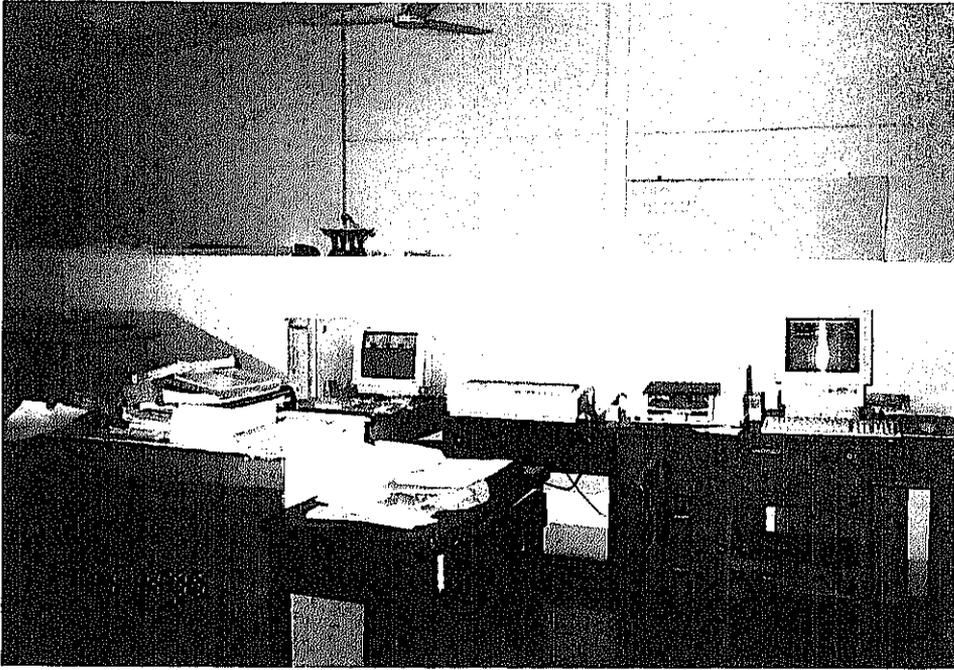


ウエストビサヤRSTC実験室内の物理の机



原隊員の自作教具





アテネオ・デ・ダバオRSTC事務室



ダバオRSTC所長 Dr. Funa (中央女性)





ダバオRSTC所長 Dr. Funaとのうちあわせ  
(右から2番目が大野技術顧問, 左橋は新田隊員)



新田隊員 (物理担当), 及びRSTC所長 - Dr. Funa



# Philippines



400 km  
400 miles

**ビコールRSTC**  
 福田純代 (化学 / 6年度1次隊)  
 山田智康 (物理 / 6年度1次隊)  
 藤田英一 (地学 / 6年度3次隊)  
 大西かおり (生物 / 7年度2次隊)

**ウエストビサヤRSTC**  
 市川陸美 (化学 / 6年度3次隊)  
 原芳久 (物理 / 6年度3次隊)  
 三宅ゆり子 (生物 / 7年度1次隊)

**アテネオ・デ・ダバオRSTC**  
 新田孝之 (物理 / 7年度1次隊)  
 山崎努 (地学 / 7年度2次隊)  
 鈴木真理子 (化学 / 7年度3次隊)



## 目 次

序文

写真

地図

目次

1. 行 程	1
2. 面談者	2
3. 調査団派遣の目的及び団員構成	3
3-1. 目的	3
3-2. 団員構成	3
4. R S T Cでの隊員活動	3
4-1. 現在の隊員活動	3
4-1-1. 活動中の隊員	3
4-1-2. R S T CでJ O C Vが目指す活動	4
4-1-3. 3モデルR S T Cでの隊員活動	4
1) ビコール大学R S T C	4
2) アテネオ・デ・ダバオ大学R S T C	5
3) ウエスト・ビサヤ大学R S T C	5
4-2. R S T C活動計画	6
4-2-1. ビコール大学R S T C	6
4-2-2. アテネオ・デ・ダバオ大学R S T C	8
4-2-3. ウエスト・ビサヤ大学R S T C	8
4-3. R S T Cの現在の位置付け	9
4-3-1. 予算	9
4-3-2. 人員配置	10
4-3-3. 施設	11
4-4. 期待されるR S T C活動	11
5. パッケージ協力の中でのR S T Cでの隊員活動	12
5-1. プロ技術活動との連携	12
5-1-1. S M E M D P研修の地方展開	13
1) 頻度	13
2) 隊員の参加形態	13
3) 開催場所	13
5-1-2. 情報交換	14
1) 交換内容	14
2) 方法（日程／頻度）	14
5-2. R S T Cの他の活動とS M E M D Pとの関連	14
5-3. 無償資金協力援助の位置付け	15
6. 調査結果－今後の課題－	15
6-1. 日本側関係部署の連携について	15
6-2. フィリピン側への協力活動の普及について	16
6-3. 隊員の配属先と期待される活動について	16
6-4. R S T Cの施設供与について	17

付属資料



1. 行程

日付	時間	内容
11/6(M)	am/pm	東京ーマニラ移動、事務所打ち合わせ、隊員との懇親会
11/7(T)	am	宮本チーフアドバイザー訪問（高橋シニア同行、以下全行程） プロ技協専門家訪問（UP-ISMED）
	pm	PNVSCA局長表敬 DOST-SEI（科学技術省-理科教育センター）表敬
11/8(W)	am	マニラーレガスピ移動
	pm	ビコール大学RSTC訪問
11/9(Th)	am	ビコール大学RSTC訪問
	pm	隊員生活環境調査 タバコ国立高校訪問
11/10(F)	am/pm	レガスピーナガ移動
11/11(S)	am	ナガーマニラ移動
	pm	書類整理
11/12(Su)	am	書類整理
	pm	マニラーサンフェルナンドス移動（木岡調整員同行）
11/13(M)	am	ドンマリアノマルコス大学訪問
	pm	サンフェルナンドスーマニラ移動
11/14(T)	am	マニラーダバオ移動
	pm	アテネオ・デ・ダバオ大学RSTC表敬 ダバオーセブ移動
11/15(W)	am	セブーイロイロ移動
	pm	ウエストビサヤRSTC訪問
11/16(Th)	am	イロイローマニラ移動
	pm	事務所長への報告
11/18(F)	am	マニラ日本人学校表敬
	pm	マニラーバンコク移動

## 2. 面会者

<p>日本側関係者</p>	<p>宮本パッケージチーフアドバイザー  日浦プロ技協チームリーダー代行  今西プロ技協専門家  曾武川プロ技協専門家  山田プロ技協専門家  今野プロ技協コーディネーター  鈴木マニラ日本人学校校長  原マニラ日本人学校事務長  橋本JICAフィリピン事務所長  飯島JICAフィリピン事務所次長  木岡JICAフィリピン事務所調整員  田口JICAフィリピン事務所調整員  佐藤JICAフィリピン事務所調整員  高橋協力隊シニア隊員</p>
<p>フィリピン側関係者</p>	<p>Dr. Tan(Deputy Direcot, UP-ISMED)  Dr.Davide(Director, PNVSCA)  Dr.Ailan(Financial Chief, DOST)  Mrs.Pasatimpo(Researcher, SEI)  Mrs.Ampi(Researcher, SEI)  Dr.Cicup(Directort, Bicol Univ.)  Dr.Monco(Asst. Director, Bicol Univ)  Dr.Sena(Director, Bicol RSTC)  Dr.Paguio(Instructor, Bicol RSTC)  Dr.Cordovilla(Instructor, Bicol RSTC)  Dr.Vida(Instructor, Bicol RSTC)  Dr.Corpus(President,DMMMSU)  Dr.Lucero(Chiarman of Bio.Scie Dept., DMMMSU)  Dr.Gavina(Professor, DMMMSU)  Dr.Funa(Director, DMMMSU)  Dr.Cocjin(President, West Visaya State Univ.)</p>

### 3. 調査団派遣の目的及び団員構成

#### 3-1. 目的

フィリピン共和国理数科教育開発パッケージ協力（以下＝パッケージ協力）において、現在協力隊員は地方3地域にあるRSTC（Regional Science Training Center）に配属され活動中である。

当調査団の主となる派遣目的は、1）隊員活動実態調査、2）配属先であるRSTCの現時点での機能状況調査、3）パッケージ協力関係者との今後の展開についての意見交換等である。

#### 3-2. 団員構成

団長	大野政雄（青年海外協力隊技術顧問）
協力企画	山本太（青年海外協力隊派遣第一課職員）

### 4. RSTCでの隊員活動

調査団派遣時点において協力隊員は地方3地域にあるRSTCに合計7名（病気療養一時帰国中の1名を含む）配属されている。その内訳はピコール大学RSTC（Region 5）に3名（物理／化学／地学担当隊員1名ずつ）、アテネオ・デ・ダバオ大学RSTCに1名（物理担当隊員1名）、そしてウエストビサヤ大学に3名（物理／生物／化学担当隊員1名ずつ）となっている。計画としては各RSTCに理科4科目の隊員を1名ずつ配置することになっており、残る5ポストに対して現在4名の派遣が決定している。

またその活動の内容としては、配属されているRSTCを中心にして各RSTCが担当する地域の理数科教育レベルの向上を図って行くという目的のもとに、RSTCのスタッフ（隊員のカウンターパート）と共にそれぞれの研修プログラムに技術的支援をする形で参加して行くことである。

#### 4-1. 現在の隊員活動

##### 4-1-1. 活動中隊員（H7.12.1 現在）

RSTC	地区	物理	化学	生物	地学
ピコール大学 （レガスピ）	V	山田智康 (6/1)	福田純代 (6/1)	大西かおり (派遣予定)	藤田英一 (6/3)
ウエストビサヤ大学 （イロイロ）	VI	原芳久 (6/3)	市川陸美 (6/3)	三宅由里子 (7/1)	選考中
アテネオ・デ・ダバオ大学 （ダバオ）	XI	新田孝之 (7/1)	鈴木真理子 (派遣予定)	瀬古亜希子 (派遣予定)	山崎努 (派遣予定)

#### 4-1-2. RSTC でJOCV が目指す活動

パッケージ協力全体の目標は、フィリピンにおいて理数科教員指導者養成のシステムを確立することにある。この大きな目標のもと、社会開発協力部が実施するプロジェクト技術協力においては、中央のSTTC(Science Teachers Training Center)において理数科教師の指導者の育成を行い、JOCVがRSTCにおいて中央レベルでの研修で学んだ指導者と共にその指導法を地方の末端の学校まで普及させることにある。

RSTCに配属になっている隊員は、現場の理科教育に対して、実験・観察により重点を置いた、指導方法を徹底させるために、実技研修を行い、また実際現場に出向く巡回指導等を主な活動内容としている（詳細後述）（また個々の隊員の活動については付属資料2のシニア隊員報告書も参照）。

#### 4-1-3. 3モデル RSTC での隊員活動の実際

##### 1) ビコール大学

活動の中心はモービルスクール（巡回指導）であり、それに付随して、現場の学校への要望アンケート調査、また施設の整備等を行っている。

モービルスクールにおいては以下の点において特色がある。

##### \*研修テーマの選定

希望の多いものをアンケートをとり、その中で基礎的なものを取り上げている。

##### \*運営

授業研究会をまず行い、実際に現場の教師の授業を観察することにより、より良い方法を見つけ出そうとしている。また、事前に参加者に呼びかけて、実際に工夫して使用している教材の持ちよりを促し、研修会の時に発表してもらうようにしている。隊員の役割分担としては、山田隊員が物理のオームの法則について教授し、福田隊員が化学の酸性・アルカリ性について、そして藤田隊員は今回は記録係（ビデオ撮影）として参加している。

また、施設整備としては、福田隊員が教材園としての植物園及び池の整備を進めているが、最近の台風により破壊され、計画は1時中断の形になっている。

全体的な活動の評価としては、RSTC所長、カウンターパートとのコミュニケーションも良く、隊員配属が1年以上も経過したこともあり、活動は軌道に乗り始めている。今後

としては記録をとることにも重点を置き、その中で計画・準備・実施・評価としてまとめることが必要とされる。

## 2) アテネオ・デ・ダバオ大学

隊員の配属が3つRSTCの中では一番最後であったにもかかわらず、モービルスクールの計画も着々とたてられ、無償資金協力で器材が供与されたダバオ地区の学校を中心に指導が96年11月から開始される予定である。こうしたモービルスクールの計画とは別に、新田隊員独自に周辺の学校を訪問し、理科教員とのコミュニケーションをはかり、勉強会ができるサークル作りを進めていくことである。その中で、新田隊員自作の教具の開発も考えられている。

ここのRSTCの所長はRSTC専属ということもあり、また私立大学に付属するという性質もあるのか他の公立の学校にはない活動に対する積極性が見られ、その分隊員も助けられている。隊員の配属が順調に進めば、活動のさらなる充実も十分に期待できる。その時のために現時点からの記録の蓄積がビコールRSTCと同様要求される。

## 3) ウエスト・ビサヤ大学

モービルスクール（ここのRSTCでの呼称はアウトリーチプログラム）はここウエストビサヤでは以前より行われており、隊員は従来のものに参加する形となる（詳細後述）。また、原隊員による低コストでの教具製作研究会も計画されており、50人あたりでの教具を製作し受講者に販売する予定である。こうした活動は地域教員の授業研究意欲を高めるという点で評価されている。

RSTCの職員が大学と兼任という事情もあり、活動があまり活発でない傾向も見られるが、今後職員の充足も進められる予定であり、隊員が参加することによるモービルスクールの内容の充実、また、周辺校へのネットワーク作りが今後の隊員活動の課題となる。

### 4-1-4. 望ましい RSTC での活動

RSTCは現職教員の研修期間として30年余の歴史をもっている。今までのRSTCの活動は長期の夏期休暇中のみ教員研修が行われていたが、それも単位取得による免許付与の研修会であった。現在行われているSummer InstituteのCertificate Programがそれにあたり、大

学の教授たちが学生に講義するような講義中心のものである。

日本の理科教育センターが行っていた研修会は現場出身の指導主事が指導者となり、教員の授業改善のための実験を取り入れた研修会で、言い替えれば現場密着型の研修会であり、RSTCのこれまでの研修とはまったく異質のものである。

RSTCのトレーニングは、授業の改善につながるものであるべきであると考えられる。STTCの日浦氏をはじめとする専門家の考え方も同じで、授業の改善につながる研修が行われている。それはつまり、RSTCでの隊員活動も授業に密着した研修活動として地方に出張して研修会（いわゆるモバイルスクール及びアウトリーチプログラム）や、学校訪問しての巡回指導（ダバオRSTCでは実験器具の操作研修会と呼んでいる）を行うことである。現在のRSTCの活動もこうした考えに沿って軌道に乗り始めており、これは「チーム派遣にかかる予備調査報告書」（1994.6）に「パッケージ協力を成功させる方途としてのRSTC隊員の子想される活動」として提言した内容と一致してきているといえる。

## 4-2. RSTC の活動計画

本調査団において1つの主要な調査項目として捉えたのは、隊員が活動を行う核となる3RSTCにおいて現在どのような活動が行われているか、また今後の活動計画について関係者と意見交換をすることであった。それにより、協力開始より1年をすでに経過した現時点での活動を評価し、パッケージ協力全体中で協力隊活動がいかに位置付けられるかを判断するための基礎的知識を得ることができる。以下に訪問順に各RSTCの活動状況および計画をまとめる。

### 4-2-1. ビコール大学 RSTC

（現在進行中のプログラム）

#### 1) 教員再訓練を目的とした夏期講習 (Summer Institute)

これは、以下残りの2RSTCにも共通した活動であるが、夏休み期間を利用して、現役教師を対象にRSTCにおいて理科教育方法の再訓練を行うものである。講義受講者には修了証書 (Certificate) が授与される。予算的には、DOST (Dept. of Science and Technology) が支援し数年来に渡り行われている。隊員はトレーナーの補佐として参加している。

#### 2) 周辺校の巡回指導

ビコールRSTCがカバーするRegion 5 地域の小学校、高校教師を対象に、その地域の中核校を巡回し、理科教育方法について指導するプログラム。

ビコールRSTCでは、ESEP High School (世界銀行によって贈与された実験教室等を所有

する学校)をクラスター校(中核校)とし、その周辺の学校の教師がそこに集まり研修を受けている。

予算は、ピコール大学、及びDECS (Dept. of Education, Culture and Science) より出ている。このプログラムは、この地域では、隊員が配属されてから始まったものであり、隊員はDECSとの業務調整や、実際に巡回指導において実験方法の指導等を行っている。

(現在計画されているプログラム)

### 3) SMEMDPの地方展開への参加

これは、マニラのUP-ISMED-STTC (University of the Philippines-Institute of Science and Mathematics Education Development-Science Teacher Training Center) において実施されているJICA社会開発協力部のプロジェクトであるSMEMDP(Science and Mathematics Education Manpower Development Project)において理科教育方法の訓練を受けたリーダー的指導者が、それぞれの地域に戻り、地域の中核校においてその内容を現場の教師に普及していく活動である。Region 5においては、RSTCの巡回指導も行っている、ESEP High SchoolでもあるTabaco National High Schoolにて1995年12月より第1回が開催予定である。これは現計画では各地域において年1回、期間は2週間で開催される予定であり、トレーナーには、各地域の教育機関(RSTCも含む)からマニラでのSMEMDPに参加した教師が当たる。予算的には、各地域のDECSのMOE (Maintenance and Operational) の予算の一部を当てることになっている。

隊員はこれには、トレーナーの補佐として参加することになっている。

### 4) 短期、長期の現役教師を対象とした研修プログラム

これは年間を通じて行われるプログラムであり、短期のものは週末を利用し、ある特定のトピックにしばり(例えば、小学校レベルの実験器具の使い方など)講義する。また長期のプログラムとして、1) 特定の教科(例えば地学)を大学レベルで専攻していない理数科教師を対象に、その教科について講義し終了証書(Certificate)を発行するというもの、また、2) 自己の専門分野での知識を強化する目的の講義(Diploma Program)の2つから成る。これらは、年間を通じて、平日は夜、週末は昼間開講される予定である。予算的には、参加者から授業料を取るにより自主的にRSTCで運営していくということである。隊員はおそらく、実験講義の指導等に当たると予測される(付属資料3の同RSTC作成パンフレットも参照)。

#### 4-2-2. アテネオ・デ・ダバオ大学 RSTC

(現在進行中のプログラム)

##### 1) 教員再訓練を目的とした夏期講習

内容は、ビコールRSTCのそれに準じる。

(現在計画されているプログラム)

##### 2) 周辺校の巡回指導

内容は、ビコールRSTCのそれに準じるが、開催場所について若干異なる。ここRegion 11においては、日本政府の無償援助機材が供与された学校をクラスター校として1995年12月より開催予定である。また予算的には、DECSの支援と参加者からの授業料に依るという計画である。

##### 3) SMEMDPの地方展開

内容はこれもビコールRSTCのそれに準じるが、開催場所・時期については、アテネオ・デ・ダバオRSTCにて1996年4月に開催される予定である。

##### 4) 短期、長期の現役教師を対象とした研修プログラム

これは、長期のDiploma Programを除いては、ビコールのそれに準じるものである。しかし、予算的裏付けとしては、市からの援助に頼る予定である。

##### 5) 夏期教員養成課程学生対象プログラム

これは、Region 11地域にある大学機関に属する教員養成課程の学生を対象に、理科の実験方法などを中心に夏期に講座を開くというもの。授業料をとって運営していく形をとる予定。

(また、全体の計画、及び新田隊員作成計画については付属資料4及び5を参照)

#### 4-2-3. ウエストビサヤ大学 RSTC

(現在進行中のプログラム)

##### 1) 教員再訓練を目的とした夏期講習

内容は、ビコールRSTCのそれに準じる。

## 2) 周辺校の巡回指導

内容は、ビコールRSTCのそれに準じるが、開催場所については、地域の中心校という定義で、特にそれ以上の指定はない。また予算は参加費に頼っている。隊員はRSTCのそれぞれの科目の担当者とチームを組み講義に当たる予定である。すでに巡回指導そのものは開催されているが隊員の参加はこれからである。

(現在計画されているプログラム)

## 3) SMEMDPの地方展開

内容等はビコールのそれに準じる予定であるが、開催場所・時期については未定。

## 4) 年1回の教員知識向上セミナー

これは、各科目ごとに年1回短期間に開かれるものであり、現役教師に最新の情報を提供することを目的で開かれる予定。予算的裏付け、開催時期については未定。

### 4-3. RSTCの現在の位置付け

RSTCの活動計画については、上述のとおりであるが、それらの活動がいかなる裏付けを持っているのかに関して、現在のRSTCの体制についてまとめてみる。

#### 4-3-1. 予算

個々の活動の予算拠出については上記に述べたとおりである。それを総合してみると、現在のRSTCの予算は、付属の大学よりの拠出、またDOST、DECSといった機関からの支援、或いは研修参加者の参加費にその1部を頼っていると考えられる。しかしながら、その内訳についてはこの活動によって違い、それらが継続して毎年確保できるものであるかも不確かである。

特に新規の活動に関しては、例えばアテネオ・デ・ダバオRSTCにて予定している、教職課程の学生対象の研修等については市からの財政支援をおおぐ予定であるが、それはまだ確定していない。

また、現在進行中の活動についても、高橋シニアの報告によると、来年度も同じだけの支援が例えばDOST等から得られるかはわからず、それよりかは削減の方向にあるという。

更に、3 RSTC共通に、自前で参加費を徴収して運営費を賄う計画がある。実際に巡回指導への参加費を、ウエストビサヤRSTCは徴収して運営しているが、それとて、開催回

数が1年に1回ということもあり、参加者の負担が少ないので可能になっている背景がある。それを、ビコールRSTCで計画している長・短期研修に当てはめて実行できるかはこれから見ていく必要がある。ただ、そうして自主的に運営費を捻出して行こうとする姿勢は評価されるべきである。

#### 4-3-2. 人員配置

現在の3 RSTCの人員配置は以下のとおりである。

(ビコールRSTC)	
専属	所長、副所長、他各科目担当教官数名
大学との兼任	科目担当教官数名 (現在専属にするため交渉中)
(アテネオ・デ・ダバオRSTC)	
専属	所長
大学との兼任	科目担当教官すべて
(ウエストビサヤRSTC)	
専属	なし
大学との兼任	所長代行 (現在専属所長を選出中) 他、担当教官すべて

人員配置の面で見れば、ビコール大学RSTCは他2カ所より充実している。また、現在積極的に大学側に働きかけて、所員のRSTCへの専属化をはかっており、研修等開催による参加費の徴収により、大学に負担をかけずに人員の予算的支援をも行いたいというのが所長の考えである。また、アテネオ・デ・ダバオ大学RSTCについては、そうした所員の専属化の動きは見られないが、大学側が時間調整を行い人員の提供を円滑に行っている模様。ただ、ウエストビサヤ大学RSTCにおいては、所長選考に時間がかかっており、その間は大学と兼任の担当者が所長を代行している。そのうえ、各科目の担当教員が大学との掛け持ちに負担を感じており、調査団訪問時にも学長に担当者の増員か、大学側授業の軽減を嘆願していた。学長も来訪者がいたこともあり、そのことについては至急検討することであった。

### 4-3-3. 施設

前回調査団派遣時と大きく変わっていないが、現況は以下の通りである。

(ビコールRSTC)	事務室、ならびに教室、実験室が1室ずつ
(アテネオ・デ・ダバオRSTC)	事務室1室のみ
(ウエストビサヤRSTC)	事務室、コンピューター室、教室、教官室が1室ずつ

最近変化した事項としては、ダバオRSTCの事務室が移動して多少広くなったことがあげられるが、相変わらず教室等は大学の施設を間借りしている状態である。これも、パッケージ協力からの施設供与を期待していることの現れであるといえる。

現在までの活動状況においてもすでに施設・設備の不足は大きな障害となっている。

ビコールRSTCの実験室は日本の中学校の2分の1以下で、実験室はなく水道が片隅にあるだけであり、またすでに購入した機材で部屋は満杯の状態である（写真参照）。

ウエストビサヤRSTCは比較的教室に恵まれているが、実験準備室としての機能は持っていない。目下教室を増築中とのことであるが、それが準備室としての機能を備えているかどうか疑問である。

ダバオRSTCに於いては、専用教室は皆無である。

こうした状況において、上述した活動を遂行することはきわめて難しく、専用の施設・設備の拡充が必要不可欠である。

以上、RSTCの現状を、予算、人員、施設の面から考察したが、ここでRSTCの存在定義について改めて考えてみたい。

本調査団が派遣されるに当たっても、事前に送付された高橋協力隊シニア隊員の報告書にRSTCの体制についての指摘があり、それによると、RSTCがどこに帰属するものなのかという存在定義に係わることに危惧を抱いている背景があり、それを調査することも一つの目的であった。高橋シニアの危惧は帰属が曖昧なため、予算確保などで体制が固まっておらず、RSTCの体制づくりそのものに隊員の主業務になってしまうのではというものであった。

それに対しては、まずRSTCの存在定義については、行政機構的、また一部の研修の運営費の拠出の面で、DOSTに帰属し、その他の予算的処置（人件費、施設運営・管理費等）の面で大きく付属の大学に依存すると考えられる。こうした二重支配構造は高橋シニアも指摘しているが、今回の関係者との意見交換では、実質的には大学側に依存する部分が見受けられ、活動計画等については中央のDOSTの方針に沿うというより、一種独立した機

関として存在するものであるとの印象を受けた。たとえば、RSTCとはなにかという問いに対しては、共通に等しくDOSTに付属する機関であるとの答えは得られず、むしろ、それぞれの地方の独自性があるので、活動に関しても統一されたものにはなり得ないとのことであった。それは、行政機構的にはDOSTに属するが、その中央からの指針があるわけではなく、また、予算的にも全面的に支援されているものではない現状が今のRSTCの関係者の考えに反映されているとあってよい。特にダバオのRSTCがアテネオ大学という私立の大学に存在し、人件費等の予算がそちらからでている現実にはRSTCの存在定義を確立することの難しさを物語っている。

従って、RSTCが現実に行わなければならないのは、それぞれ地方のニーズにあった計画を立てて、それを遂行するための予算等はそれぞれに調達する必要があるのである。その予算の調達に当たって、DOSTは自身の予算の分配において優先権を与えることにはなっているが、すべての活動をまかなうものではないのは事実である。

こういった環境において、各RSTCは独自性を出して活動を遂行していこうとしている。それに係わる人員の配置には各RSTCによって差はあるが、隊員がすべての責任を負ってRSTCの体制づくりに当たる状況に陥ってしまうかと言えば、必ずしもそうとはいえない。アテネオ・デ・ダバオのRSTCについてはもう少しの人員の配置が望まれるが、他2 RSTCに関しては協力隊員が所員とともに活動を軌道に乗せていくことのできる可能性はあると考えらる。

こうした背景を元に、次の章ではパッケージ協力の中でのRSTCの活動の意義について考察する。

## 5. パッケージ協力の中での RSTC

協力隊の活動がJICA全体で行っているパッケージ協力の枠組みの中で行われている以上、その活動は他部署の活動と連携されたものでなくてはならない。現時点では、各協力（社会開発、協力隊等）の立ち上げが終わった段階で、これからその連携が構築されていくと思われる。特に、パッケージ全体のチーフアドバイザーもちょうど12月に交代し、まさに、この協力も新しい段階に入ったといえる。そこで、現在の連携の状況、またこれからの連携の在り方について考えてみたい。

### 5-1. プロ技協活動との連携

当初パッケージが発足するに当たって考えられた各協力間の連携というのは、UP-ISMED-STTCで研修（SMEMDP）を受けた各地域を代表する教職者が各地域に帰りトレーナーとして地域レベルで研修内容を普及することであった。その普及の核となるのが協力

隊員が所属する各地域のRSTCである（SMEMDPについては付属資料1参照）。

そうした考えをもとに現在行われようとしているのが、SMEMDPの地方展開である。また、この各地域共通に行われる予定の地方展開の他の連携としては、各RSTCの独自の活動にSMEMDPの訓練を受けた教員が参加し、その内容を普及するという形態である。この2点について現状を分析する。

### 5-1-1. SMEMDP の地方展開

これは、各地域にてDECS、RSTC（DOST、各配属大学）、そしてUP-ISMED-STTCの協力のもと、SMEMDPの研修内容をまず各地域の中の各地区の代表者レベルに普及する研修である。隊員が配属されている地域に限れば、上記RSTCの計画にもあるように、Region 5（ピコールRSTC所在地域）では、95年12月にタバコ国立高校で、また、Region 11（ダバオRSTC）では96年4－5月にかけてダバオRSTCにて開かれる予定である（ダバオRSTCとの計画については付属資料6参照）。

#### 1) 頻度

基本的には、研修自体は年に1回2週間程度の期間で開かれる。ただ、科目を分けて2週間の研修を違う時期に行うこともありうる。例えば、アテネオ・デ・ダバオRSTCでは95年の6月から96年6月までを1年のスパンとして、95年6月から96年3月までの10ヵ月を準備期間とし、4月から5月を研修実施期間、そして評価をその4月から1年ほどかけて行うことになっている。

#### 2) 隊員の参加形態

隊員は、その研修実施期間にRSTCの職員をサポートする形で研修に参加する予定である。ただ、事前の準備については95年12月に開かれるRegion 5での研修会に関して言えば、隊員の参加については決まった役割分担があったようではない。但しこれから開催される研修に関しては、STTCの関係者と協議の上、役割を明確にする必要があるし、それがパッケージとしての連携を高めることになると思われる。

#### 3) 開催場所

開催場所については、タバコ国立高校がRegion 5で、ダバオRSTCがRegion 11で選ばれたように、必ずしもRSTCで行われるとは限られていない。それは、物理的な施設の有

無、使用状況によるであろうが、理想としては全地域RSTCで開催されることであり、そのためにも無償資金協力による適切なRSTCの施設および機材の供与が必要である。

### 5-1-2. 情報交換

それでは、SMEMDPそのものとの研修内容に関する、情報、知識の交換についてはいかにあるべきか。

#### 1) 交換内容

隊員が例えば巡回指導に行き末端の教師に技術指導する場合には、やはり協力隊としてのボランティア精神を考慮すると、彼ら独自で探究、開発されるべきであろう。しかしながら、SMEMDPで行われている研修の方向性に沿うよう調整していく必要がある。

#### 2) 方法（日程／頻度）

現在隊員がパッケージ協力に関して知識を得る機会としては、派遣前訓練時にチーム派遣の説明、あるいは国担当の任国事情等があるが、それはパッケージとは何であるかという説明にとどまっている。また、フィリピンに赴任してからは、高橋シニアよりブリーフィング、及びプロ技協専門家との面談があるが、技術的な指導を受ける時間は特にとられていない。これから、パッケージとして連携を深めていくにあたっては、この着任時のブリーフィングの内容を充実させるべきであろう。新隊員がSTTCに出向き現状報告を受け、意見交換、指導を仰ぐことが重要だ。その為には、専門家とシニア隊員の間でプログラムについて打ち合わせをする必要がある。ただ、その前提としてパッケージ全体の目標設定があることはいうまでもない。また、パッケージ関連隊員が年に1-2回程度集まり情報交換することも有効であろう。その時に専門家との打ち合わせがあるようにマニラで集まることも考えられるし、あるいは、お互いの配属先を持ち回りで訪問することもRSTC間の情報交換の場として貴重なものになるだろう。

### 5-2. RSTCの他の活動とSMEMDPの関連

他のRSTCの活動との関連としては、基本的には中央のSMEMDPの研修を受けた教師がRSTCでの活動に参加するということであろう。しかしながら、中央での研修の内容がそのままRSTCでのそれに持ち込まれるかについては、隊員も確信がもてないようであった。それは、中央で研修を受けた人々にはその内容（理論と方法）が知識として頭の中に入っているだろうが、それを実践するかは個々の受講者に任されている。そうしたときに、隊員が共通の情報、知識を持ちRSTCでの研修をサポートしていくことができればパッケー